

我が町・我が曳き山自慢 新町

龍溪 顕智（たつたに あきとも）

平成30年10月14日（日）午前9時、素晴らしい晴天の中、沢山の見物人に見守られて、唐津神社を出発。エンヤーエンヤーのかけ声に、嬉しそうに泳ぐ飛龍。新しい法被をまとった曳子も、飛龍と一体になって、総修復を喜びました。

はじめまして！私、新町正取締の龍溪と申します。今年は31年ぶりの総修復迎えて、大変なお祝いの年になりました。そこで、総修復について、少し書きたいと思います。私の視点で書いておりますので、不適切な表現もあるかと思いますがどうぞご容赦下さい。

飛龍誕生

飛龍は、今から172年前の弘化三年（1846年）、大石町さんと同じ年に製作されました。ペリー来航（1853年）の7年前、神集島沖に黒船が現れる（1854年）8年前のことです。

当時、京都の南禅寺におられた、唐津の中里家、日羅防を訪ねて、新町の岡口屋前川仁兵衛と石田屋伊右衛門の二人が立ち寄った時に、障壁画に書かれていた龍の絵を見て感激し、飛龍を題材にした曳山をつくることになります。



南禅寺



飛龍の障壁画

当時見たと言われる障壁画は現在も南禅寺で使われており、拝観口をあがって順路を進むと最初に目に飛び込んでくる、板戸に書かれた龍がそうです。ただ、年々色も薄くなってきているので、このままでは龍の絵が、消えてしまいそうで、私たちの原点が無くなるのではないかと心配しています。

さて、作るヤマを心に秘めて、喜び勇んで、京都から帰ってきたご先祖たち、一体誰が製作するのか？という問題が持ち上がったことでしょう。そこでまたも、中里家を頼りにしたのです。九代、中里太郎衛門（守衛重廣）、中里重造政之兄弟に製作を依頼します。曳山を作るといことは大変な作業ですよね。余程のご縁というか、相当な信頼関係があったのでしょうか。まして、同時期に3番曳山から8番曳山まで6体もの曳山が作られましたので、本体の形や造形には各町の思い入れもひとしおで、町内どうしの競争のような意識もあったに違いありません。そういう中で想像上の飛龍を製作するというのは、相当難しい作業であったことでしょう。

最初は粘土で原型を作られたとお聞きしますが、創建時の金箔下に使われた黒い箔下漆が殆どの金箔下地にはっきり残っていることから、綿密に検討されて全体像から完成させたトータルデザインであったようです。

今回、塗面を調査する度に新しい発見の連続で、いったいどうなるんだろうと心配しながら進めましたが、この度復元した飛龍は、その心配も吹き飛ばすように、美しく精悍な姿でした。当然のことながら、当時の町民が、完成を非常に喜んだのが目に浮かぶようです。



曳山巡行図に描かれた
明治初期頃と思われる飛龍

創建時を目指す 小西美術工藝社との出会い

今回の塗替えに際し、新町では平成 26 年 7 月 26 日（土）に総塗替準備委員会を設立しました。前回 31 年前の塗替え資料も少なかったので、先ず、話し合いを重ねて骨子を作っていました。それから、事業計画書や予算書、スケジュールの作成、また木材の確保の為、町内をあげて視察などにも行きましたし、若手での会議も重ねながら意識向上に努めましたが、どこかで、まだ先のことという空気もございました。

大きな転機となったのは、平成 28 年 6 月 4 日（土）の保存修復委員会（通称審議委員会）と呼ばれる会議で、私たちの、この飛龍が、次の総修復に決定した時のことでした。

2013 年 5 年前の事故で、ヤマがこわれた時に、前回の 31 年前の修復で、飛龍に化学繊維が使われていることが判明しましたが、それは私たち若い者にとっては、非常に衝撃的なことでしたから、いつか取り除きたいと願っておりました。

そのことを審議会に諮ったところ、曳山を確認されて、『可能な限り化学繊維を取り除いて、当時に戻す最後のチャンスです。創建当初の姿を目指していきましょう』と、九州大学名誉教授、菊竹先生が委員長として言って下さったことで、今回の塗替えは『創建時を目指す』という、大きな目標でスタートしたのです。

その時から町内の意識も変わりました。本当に嬉しかったですね～。

ちょうどその頃、江川町さんの修復が進んでおりましたが、その修復調査方法が凄いと、噂になっておりました。非常に詳細にわたって行われたということをお聞きしていたので、創建時を目指すことを目標にした私たちにとって、小西美術工藝社の存在は大きなものになっていきました。

そして、平成 28 年の唐津くんち、見事に修復された江川町さんの姿は、私たちの胸に突き刺さりました。全てが素晴らしい、中でも飛龍全体に塗られる赤に目がとまって、七宝丸の胸に彩られた火焰の赤、これこそが私たちの目指す赤だと、確信したのです。

平成 29 年 6 月 18 日（日）、運命の入札です。結果は、いろいろお聞きになられた方もおられると思いますが、最終的にはくじになり、今回修復していただいた小西美術工藝社に決定したのです。それから、町内の若手 18 名を連れて、東京国立博物館や日光東照宮に行って、小西さんの仕事を拝見させていただきました。すごいなの、ビックリしましたね～。東照宮陽明門の説明を受けながら、これで飛龍は大丈夫だと思ったことでした。

そして今年のくんちが終わり、曳山の蔵にいよいよ入ったのでございます。

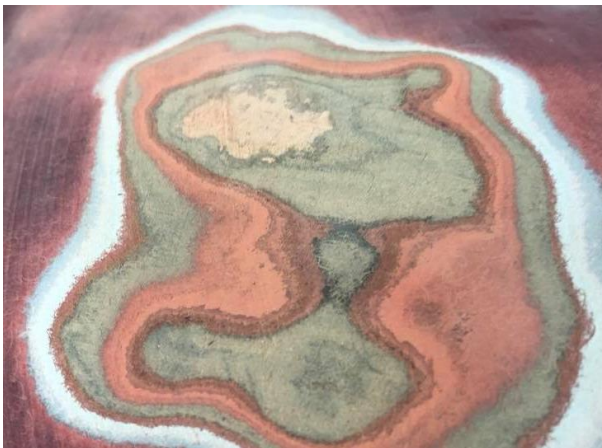


日光東照宮 国宝『陽明門』

調査

それでは、調査でわかったところをご紹介します。

- 1、鼻の上を削ったら、ちゃんと5回の塗替えの5層の塗り面が出て来て、創建時の色が特定されました。
- 2、目を調査して、創建時のまなこの位置が分かりました。これまでより外側に少し小さな睛（ひとみ）でした。



確認された5層の塗面



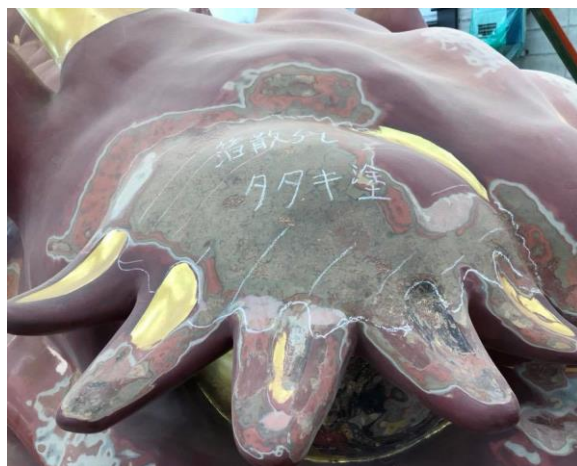
睛の大きさと位置が分かりました

3、特にビックリしたのが、口横のヒゲですが、赤と金箔が逆で、大きく尖った部分がツノと同じように金箔だったということです。

4、また、眉の上は朱のツルツルでなく、金箔でポコポコしていたと言われてビックリ！『石目地塗』(叩塗)と言われる工法で、材木町、大石町、水主町、江川町さんにもみられますが、唐津藩武士の鎧兜の胴飾り等に、使われていたそうです。



口横ヒゲの色が逆転していた



眉の上に発見された叩塗

5、ツノの根元からも同じように、金箔の叩塗が発見されました。

6、背ビレ根元の模様は古い写真でいろんな形が確認されていましたが、創建時は三日月型の模様だったということが分かりました。



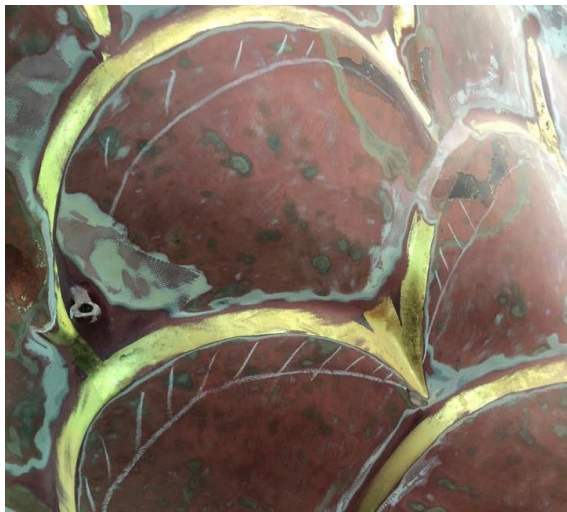
ツノの根元の叩塗



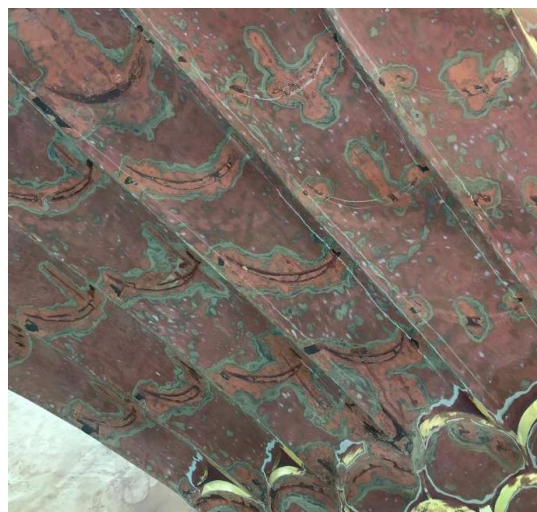
背ビレの根元の形

7、ウロコの書き方も、膨らんだ円形部分が外側に落ち込むところに金箔が施されていましたが、手前側に三日月形で書かれていました。これによって膨らみは、より丸く膨らんで見える効果があるようです。これは翼の根元にも共通する書き方です。

8、特筆すべきは翼と尾の、縦のラインで、根元が大変大きく、先（上側）にいくと、シュッととがっており、精悍さを強調しています。また、横のラインはウロコと同じような三日月型で、少し細い線で表現されていました。



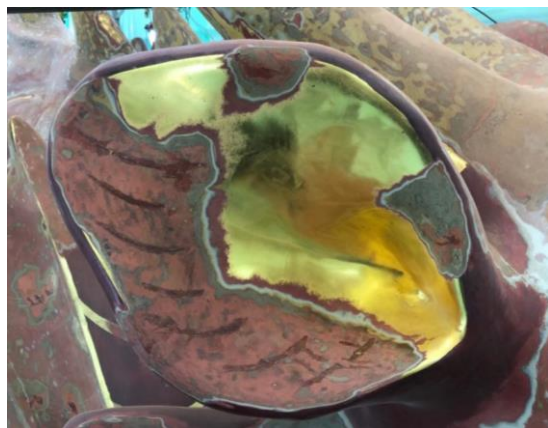
ウロコの書き方が違っていた



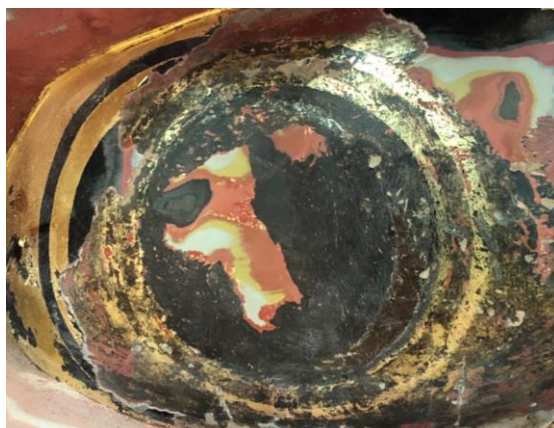
翼の縦の太いライン

9、以前まで輝く金箔に塗られた耳の中は、ツノや目と共に光彩を放っていましたが、創建時は朱の上に、金線の模様がたくさん書かれていたようです。

10、1月27日の審議会の前に、目の再調査を行うと、何と銀箔が確認されました。龍の場合、画竜点睛（がりょうてんせい）龍に睛（ひとみ）を書き加えたところ、たちまち天に昇った、という故事があるように、龍は睛が「命」です。ですから、睛から見たことのない銀箔が採取されたのは、大問題になりました。



耳の装飾



睛の中に銀箔が発見された

11、最後に一昨年事故で壊した、左爪の修復作業の途中で分かったのですが、手の甲にあたる部分に、またも叩き塗りが確認されました。

以上、これらが調査で判明した本体の装飾になりますが、これらが変わると、飛龍が大きく変わってしまうので、再度役員会に諮ることになりました。当然、これまでの歴史の中で変わってきたことも大事な歴史なので、戸惑いの意見もありましたが、創建当初の姿に戻すという目標が覆ることはありませんでした。

内部と和紙

1月後半になると、塗面の調査がほとんど終了したので、その頃より内部の化学繊維を除去する作業にかかりました。

2月中旬には殆どはがされ、和紙の状態があらわになりました。長年の使用に耐えてきた和紙も、ひび割れから水を吸ったりしたのでしょう。ぶわぶわとスポンジ状になって、糊の力が弱くなっています。押すと引っ込む状態で、中に空間が存在しており、部分的ですが、カビなどで変色した所も確認できます。それらを取り除こうとすれば、どこまでもはがせたり、中には、和紙の繊維がボロボロとくずれるところもあって、除去の判断も難しくなりました。老朽化の現状を突き付けられて、修復方法の決定には十分な審議が必要になりました。

最終的にはボロボロのところ、はがれそうな和紙を取り除いて、新しい和紙を糊（のり）貼りする一閑張（いっかんばり）方式で、当時のままに修復することになりました。麻布を間に入れる方法もあるのですが、飛龍からは麻布（紗）は発見されなかったもので、骨組みに補強をした上で、和紙で重ね張りすることになったのです。



浮いた当時の和紙



和紙を貼った内部

小西美術工藝社の塗師さんも、このように和紙をはったのは初めてで、本当に大変だったといわれるほど、沢山の和紙が貼られました。糊は国産のわらび糊を使用し、水との配合割合も正確に行って糊を作って貼っていきます。皆さんご存知かもしれませんが、修復の和紙には、今回はじめて佐賀市大和町で作られた名尾和紙を使用しました。

きっかけは曳山が一貫張で出来ていることから、修復にどこの和紙を使われるか、塗師さんに聞いたところ、関東地方でつくられた和紙とのこと。それならば、地元の和紙を使いたいとお願いし、肥前名尾和紙の谷口社長に直談判をしたのですが、唐津くんちの伝統的な曳山につかってもらえるとは、とても光栄なことと、非常に喜んでいただき、すぐさま多くの和紙を用意していただきました。かじの木を原料として作られた、非常に強い和紙で、補強の面からも大変質の高いもので、内側からも当時のところで修復できて、本当に良かったと思います。



修復には佐賀市大和町の
肥前名尾和紙を使用しました

これから

さて、このあと修復補強や塗りの作業、金箔貼り、台の製作や記念事業と移っていくのですが、あまりにも長文になりますので、残念ですが、今回はこれまでに致します。機会がございましたら、また続きを書きたいと思います。

今年のくunchi、よかったらこの記事を参考に、飛龍の変わったところを探していただければ、大変嬉しく思います。

今回、創建時の172年前の姿を目指すという大きな目標を掲げて、突き進んできて、ようやく再現された飛龍。平成30年（2018年）9月15日の組立てで完成形を見た時に、私たちは何を思うのか？毎日、飛龍と会話をしながら、小西美術工芸社の塗師さんと話しながら、先人の思いを見つめ続けた日々でした。

完成した創建時の飛龍を見て、心から思うことがあります。私たちには、この素晴らしい曳山を、未来の人に、子供たちの為に、大切に継承する責任があるということです。自分たちが幸せであるように、未来の人たちの幸せを奪わない行動が必要です。ご先祖が作って下さった曳山（やま）を、創建から今、そして未来へ。これからも私たちはヤマを通して、時代を越えて、喜びを分かち合っていくのです。曳山（やま）を大切に思う人は、十分分かっていただいているとは思いますが、今一度皆さんの心に留めて、いつまでも唐津の宝を大切にしてほしいと願います。

新組は今年、新たな出発をします。皆さまのご声援に恥じぬよう、飛龍らしく曳きまわしますので、良かったら応援をお願い致します。これまで温かく見守っていただき、本当にありがとうございました。



新町 正取締役 龍溪 顕智（54歳）
（たつたに あきとも）

